寺檀関係の推移

寺院は社会の中でも自然発生的に生まれたものではなく、目的と機能をもって存在してきた。

寺院は、釈尊以来今日に至るまで、その宗教実践の道場と見做されてきているが、簡略にその歴史を繙(ひもと)いてみる。

寺の語源はサンガ、精舎である。釈尊当初、寺は出家者が聞法、修行する場であった。釈尊滅後、その舎利塔を中心に集う人々の教団では寺は出家と在家の共同の道場としてあったと考えられる。サンガの意味に「**密接な結合**」「**信仰者の共同体**」の解釈があることも注意すべきであろう。

日本では仏教渡来当時、国家と貴族の祈願所であり、繁栄の象徴であった。教化の対象も限られた階層を中心とし、当時の寺院の遺構を見ても信徒の座る席は狭く、一般民衆の集まる施設ではないことが解る。

鎌倉時代になって初めて仏教は民衆の手に渡ったといえる。日蓮聖人の支持層は主に中・下級の武士であり、親鸞上人の支持層は地方農民にも広がっている。伽藍の造営も官立ではなく、信仰心に基づく私立となっている。

こうした民衆による寺院の建立は未法思想とも相俟って小規模の実用本位のもので、布教所、集会所として使われた。ここに、宗教活動の拠点としての寺院が誕生したのである。

江戸時代に入り、徳川幕府の政策により、それまで自主、自立していた各宗寺院が幕藩体制の中に組み込まれることになった。幕府は本寺・末寺の関係を制度化し、寺格を定めることにより全寺院を統轄し、宗門改めの制を設け、寺請け証文が定められるに至って寺院は戸籍管理権を持つことになった。このため、寺院と僧侶は別格の社会的地位を得たのである。

この結果、幕府の社会階級秩序維持の政策は、折伏逆化を行軌とする日蓮教団の特色を失わしめた。

門弟の教育は勤行等、礼儀作法を主とし、僧侶としての形式を整えることが重視された。このため、専門分野での評価は高い学者や布教者は輩出したものの、宗魂気慨に富み、祖意を伝弘しようとする僧侶は少なかった。

檀信徒への教化も、現世の招福の祈り、死者の追善の祈りといった、儀式的祈りが中心となり、現実改革的な布教教化活動は後退した。

こうした僧侶は、寺にやって来る人々だけを相手にするようになる。現在の寺の在り方の原型である家の宗教は、江戸時代に成立したとみなされている。

江戸時代末期に入ると、体制に組み込まれた既存の宗教では充たされない大衆の中から、天理教、金光教等の新しい宗教が台頭し始めていることが目される。

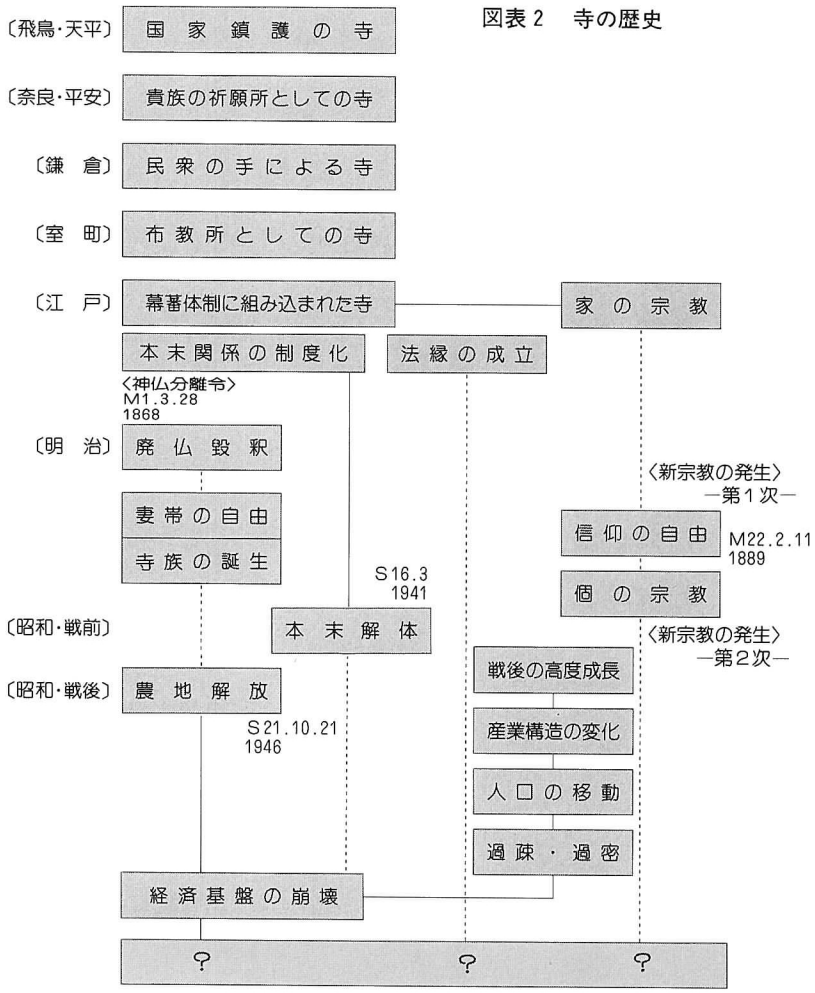
明治になり、新政府は神祇中心の祭政一致政策をとり、廃仏毀釈を断行し、仏教教団は大打撃を受けた。明治四年(一八七一)には戸籍法改正にともない、宗門改めが廃止され、檀家制度はその法的根拠を失うことになった。

明治五年には新法で僧侶の結婚が公認され、僧侶も家族を持ち、その結果、一族による世襲化が始まった。これは釈尊以来の師弟関係による寺院の相続に、新たな問題を投げかけたものであり、現在に至るまで種々の問題を提起している。

昭和に入って、政府は宗教に対する統制をすすめ、日蓮宗は本寺末寺の関係を解体するに至った。

第二次大戦後、連合軍の占領政策により寺有農地が解放され、寺は経済基盤を失った。また、家族制度の廃止と信仰の自由が認められたことによって、寺院と檀信徒の関係が自由となった。

これ以降、寺院は一ヵ寺、一ヵ寺が独立した経営により、寺門の維持を余儀なくされるのである。

幕末及び、第二次大戦後の社会変動期、アノミー状況(社会的無秩序、社会的道徳頽廃等、あらゆる社会的基準や価値が一般に見失われ、または混乱している状態)において、従来とは異なる新しい形態の宗教、新宗教が勃興している。これは幕藩体制の中で習俗化し、形骸化した既成の宗教に満足できない人々が現実的、実利的な宗教を求め始めたのである。この傾向は今日に至るまで継続し、天理教、創価学会、霊友会、立正佼成会等の教団は数百万の信徒を擁するまでに成長している。これらの新宗教は平易な教義と、旺盛な教化と、集権化された組織力によって躍進してきているが、日蓮宗を含む既成の宗教は、新時代における教団の在り方に問題があり、こうした新宗教への対策や、長所に学ぶということも怠ってきた。このことは、家単位の教化から

図表2　寺の歴史